

しが国際協力親善大使レポート

こいけ このみ
小池 木之美さん

隊次：2019年度2次隊

職種：学校保健

派遣国：ガーナ共和国

プロフィール

病棟看護師の経験を経て、JICA 海外協力隊に学校保健隊員として参加。小学生の時に医療ドラマを見て、途上国や災害現場で医療活動をする姿に憧れて看護の道に進みました。大学在学中はアジアやアフリカで病院実習、ボランティアに行き、バックパッカーとして旅をして過ごしました。そうやって色々な国にいくうちに、「途上国＝貧しくて可哀想な場所」では無いという事に気付きました。もちろん問題も沢山あるけれど、それに勝る「彼らの文化をもっと学んでみたい」という気持ちが強くなりました。病院勤務を経ていざ途上国に行こうと思った時、現地の人達と共に生活しつつ一緒に保健医療の活動に取り組んでみたいと思い、JICA 海外協力隊を選びました。

活動国の地域の気候や文化の紹介

私の派遣されていた国は西アフリカに位置するガーナです。私が住んでいたガーナ南部の沿岸地域は熱帯雨林気候です。雨季と乾季に分かれますが、年間を通じて高温多湿。陽気な人が多く、道を歩いていると街中の人たちが声をかけてくれます。宗教はキリスト教が7割、イスラム教徒が2割くらい。80を超える言語があり、公用語として英語・チュイ語が使われています。

活動や生活について

私は2020年の1月にガーナに初めて赴任しました。現地語のファンティ語を勉強しつつホームステイを楽しみながら、今後一緒に仕事をする予定の同僚、ヒルダさんの活動と一緒に回っていました。協力隊の先輩の活動も見せてもらいつつ、「自分はこんな感じで活動しようかなあ」と計画をたて始めたタイミングで、新型コロナウイルスの影響で緊急一時帰国することになり、子どもの頃から夢に描いていた生活はあっという間に終わりを告げました。元の職場が新興感染症を受け入れる病院だったことから、元同僚がコロナ対応に看護師として奮闘する中、自粛しかできない生活に悶々としていました。そんな時に、「滋賀県のコロナ感染症の軽症者を受け入れるための宿泊療養施設の開設にあたり、看護師として働かないか」との誘いを受け、宿泊療養施設で看護師として働きつつ再赴任の連絡を待ちました。緊急一時帰国から約1年後の4月、ガーナに再赴任できることになりました。

「コロナ」を理由に急に日本に帰国して、1年も経って戻ってきた私を任地の人たちはどんな気持ちで迎え入れてくれるのか。不安も抱えつつ戻ってみると、1年前と変わらず陽気に迎えてくれる現地の人たちがいました。1年前に置き去りにした荷物もヒルダさんが家に保管しておいてくれて、再赴任後すぐに活動の再スタートが切れました。再赴任できたらガーナ人主体の活動を心がけよう、と思っていたので、ヒルダさんに「私はあなたの仕事をよりよくするために何ができますか？」と聞き、そこで上げてくれた内容から計画を立てて自分にできそうなことをやりました。具体的には、保健の授業や保健だよりの作成、傷病管理記録の開始などを行い、学校での保健の授業は5テーマで合計1060名に実施しました。また、学校巡回をする中で保健担当教員の学校保健に対する理解度ややる気に差があると感じ、保健所スタッフと共同して保健担当教員研修を地区全員の保健担当教員に向けて実施しました。結果、研修には85名の教員が参加してくれました。

私はコロナの影響によって残念ながら2年のうち1年間は日本で過ごすことになってしまいました。しかし、その期間のコロナ関連の仕事を通して支援をする立場から支援をされる立場を経験し、「良いボランティアとは何だろう」と考え直す機会を得ることができました。結局、支援される立場の状況や協力して欲しい内容を理解しないままの闇雲な支援は、ありがた迷惑になってしまうと学びました。そのため、再赴任してからは自分のやりたいことよりもカウンターパートのヒルダさんがやりたいと思っていることに重きを置き、その中で自分にできることを活動として実施するように心がけました。協力隊としての2年間、新型コロナ軽症者宿泊療養施設の仕事もガーナの活動も、楽しいことばかりというわけではなく、大変なこと、辛いこともありました。けれど、目の前のことに集中して、大変な状況も楽しみながら頑張ることで、何事も良い方向に転換するのだと知りました。そして、自分が頑張っていると、自然と助けてくれる人たちが現れます。私にとって、一時帰国の期間も含めて、とても良い2年間になりました。



カウンターパートのヒルダさんと



学校巡回の様子



学校の生徒たち



保健の授業の様子



保健担当教員研修